



研究用試薬

ヒストファイン

第一抗体

CD79 α ウサギモノクローナル抗体(SP18) (ヒストステイナー用)

(動物種：ウサギ)

包装： 60テスト(12mL) Code：713631

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

- 本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。
- 特異性および抗原分布：ヒトB細胞抗原受容体複合体(B cell receptor complex、BCR)を形成するCD79 α (mb-1蛋白)と特異的に反応する。preB細胞の未熟な段階から一部の形質細胞の細胞質に反応する。preB細胞性の急性白血病やB細胞リンパ腫、いくつかの骨髄腫とも反応する。
- クローン名：SP18
- 抗体のサブクラス：ウサギ IgG
- 免疫原：ヒトCD79 α タンパクのN-末端領域の合成ペプチド
- 製法：ハイブリドーマの培養上清より得ている。

1. 内容

第一抗体・・・CD79 α ウサギモノクローナル抗体(SP18) (動物種：ウサギ)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に12mLを含む。

2. 使用目的

組織・細胞中のヒトB細胞の染色。

3. 切片の準備

パラフィン包埋切片の免疫組織化学および免疫細胞化学染色に使用できる第一抗体である。

パラフィン包埋切片の場合、前処理(抗原賦活化)として10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考：組織の固定状況等により10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理の代わりにヒストファイン 抗原賦活化液 pH9(Code：415201またはCode：415211)を用いたオートクレーブ処理をすることで、より良好な染色結果が得られる場合がある(裏面の■参考参照)。

4. 使用方法

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

6. 貯法

2-8℃保存。

7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	CD79 α ウサギモノクローナル抗体(SP18)
試薬略称(10文字)	CD79a-RM
バーコード	CD79a-RM
時間(分)	30

■ 研究用としてのみ使用すること。

■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4 μ m厚)をシランなどのコーティングスライド上に張り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化)：オートクレーブ処理
 - ①10mMクエン酸緩衝液 (pH6.0) を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
 - ②バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
 - ③120℃、20分間オートクレーブ処理する。
 - ④圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
 - ⑤バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。※オートクレーブ処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
 - ⑥スライドを10mMクエン酸緩衝液 (pH6.0) から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ビンを使用する)。

・ 10mM クエン酸緩衝液 (pH6.0) の作り方

A液 9mL+B液 41mL+精製水 450mL (用時調製)

A液：0.1M クエン酸水溶液：常温で保存可能

クエン酸一水和物 (C₆H₈O₇ · H₂O) 2.1g/精製水 100mL

B液：0.1M クエン酸ナトリウム水溶液：常温で保存可能

クエン酸三ナトリウム二水和物 (C₆H₅O₇Na₃ · 2H₂O) 14.7g/精製水 500mL

ここから必要な時に調製する。

■ 参考：ヒストファイン 抗原賦活化液pH9(Code：415201またはCode：415211)オートクレーブ処理を用いる場合(おもて面の■参考参照)

前処理(抗原賦活化)：オートクレーブ(AC)処理

- ①そのまま、あるいは調製した抗原賦活化液pH9溶液を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
- ②バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
- ③120℃、20分間オートクレーブ処理する。
- ④圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
- ⑤バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。

※オートクレーブ処理後は、バットおよび抗原賦活化液pH9等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。

- ⑥スライドを抗原賦活化液pH9から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ビンを使用する)。

・ 抗原賦活化液pH9の作り方

- Code：415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- Code：415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。